

## MAN IN METROPOLIS

ルイス B. シュリベック著  
ダブルディ社刊 432ページ  
1965年3月

はなしは1959年春にはじまる。カメラマンである著者はニューヨーク市西57番街の小さなアパートから、47年秋に郊外のニュージャージー州ワールドウィックの新住宅地へ移ってきた。このころアメリカ経済は45年を境に、大衆消費時代へときりかわり戦争中抑えつけられてきた高度生活への欲求が一挙に表面化しつつあった。それは同時に大都市圏への人口集中をよびおこし眠っていた大都市問題が、再び表面化したことでもあった。新住宅地の近くには200年前の古いアッカーマンの家屋が、深い木立にかこまれてがっしりとなっていた。開拓時代に建てられた農場のなかの建物は、いわばジェファソンとハルミルトンとの二つのアメリカ精神の流れの均衡点に立っていたのだった。しかしアッカーマンの家は59年には、都市化のなかで、税の値上りと周囲の開発のためついにとり壊された。自分たちの新しい心持よい住居に住んでい

た新しい隣人たちは、この重大さにくる然とした。

開拓時代の古きよきものが、彼らの生活の一部であることに気がついたのだった。行政当局者はこうしたことに関心を示さずアッカーマン一家は感傷を捨てざるをえなかった。著者は、そこに住むヘイズル、アッカーマンと話し合ううちに、都市化の犠牲者は彼女だけでなく、自分たち自身が犠牲者であることに気がついた。日ごろ大都市圏の地域構造と、そのダイナミックな動きに関心をもっていた著者は、大都市圏に住み、働く人々を追って、家庭から職場へ、地域社会のなかへと、人々の生活と行動を、大都市圏の問題を鋭い目でえぐりだしている。そしてみごとに、大都市圏の構造と人間を具体的に浮彫りにしている。この書はその14年間の成果である。

彼はたんなる語り手ではない。フルに使われた写真と、生き生きとした問題意識をもつ文章はそれぞれ写真は写真だけで一つのレポートに組みたてられ、文章は具体的事実や歴史を分析しながら、著者の思想を展開するという別の構成を示しながら、二つのものが一体となって構成されるという、見ごとな手ぎわをみせてくれる。

29年の「ニューヨークとその周

辺の地域計画委員会」と、59年のハーバート大学グループによる「ニューヨーク首都圏研究」の二つのレポートを基礎に、それぞれの産業と社会階層の代表的人物をカメラで追いつながら、個々の産業とそこに働く人々の現状と問題をとらえているが、この分厚い書のなかでとくにわれわれの興味をひくのは、著者の住むワールドウィックである。その新住宅地では、市長も6人の市参事会員、教育委員長と他の学校評議員も、新たな市民で構成されねばならなかった。これら素人の行政担当者が、おきまりの財政難と膨大な行政需要のなかで、自分たちの手で町づくりを行ない、新たな、宅地開発の規制、美観の保持、学校教育費の増大に悩み、下水溝整備のため他の市町村との話しあいでも解決していく。自分たちへの町づくりへの積極さと忍耐づよさ、そして自信にあふれた自治意識は、そこにはいまだフロンティア精神が脈々と波うっているのがよみとれる。あらゆる市民が、既成の行政枠をつくりかえていこうとしている努力は、われわれに大きな示唆を与えてくれる。〈K〉